身近なまちの風景物語(22)

見上げる足取り

雨が降ると傘を差す。

傘を持つと片手がふさがれ、かばんの中に入れるとかさばる。すれ違う時には気を遣う。

店に入るたびに傘をすぼめたり、たたんだり。傘立てに入れたり、ビニール袋に入れたり。

傘はとかく厄介モノになりがちだ。

こうした面倒をなくし、買い物の利便性を高めるため、道路上方に屋根を架けるアーケードが普及した。

当初は手動で開閉する布製が多かった。雨を防ぐよりも、買い物客や商品に対する日除けの役割があった。

1970年代以降、商店街の近代化を背景に、各地で常設のアーケードが設置されるようになった。

道路全面に屋根がある全天候型アーケードは、店舗や歩行者ともに降雨の影響を受けない。日中は歩行者専用の道路になることが多い。

歩道がある広い道路幅員の場合は、歩道の上部のみに庇のようにアーケードが架けられた。

こうしたアーケードの整備は、商店街などが費用を負担し、自治体が補助金を支出することが多い。屋根上の落ち葉や雨水の排水管の清掃などの維持費もかかる。設置後数十年を経て老朽化すると、その架け替え問題が浮上する。

確かにアーケードは雨や雪、炎天下の日差しを防いでくれる。一方で、屋根という傘で上空の視界が塞がれているのも事実だ。守られていると思うこともあれば、押さえつけられていると思う時もある。

費用問題も確かにあるが、架け替えではなく、撤去されることが増えてきた。空が広がり、四季や天気をそのまま肌で感じるようになった。

それまでアーケードに隠れて見ることがなかった店舗の二階が丸見えになる。やがて二階部分が改修され、まちに新たな表情が生まれた。心なしか、足取りも軽やかになった。

野中 勝利

筑波大学芸術系教授・芸術専門学群長

挿絵：久田琳佳子（筑波大学大学院博士前期課程１年）